

## 令和3年度 第3回学校運営協議会議事録

日 時：令和4年2月18日（木） 15：00～17：00

場 所：大阪府立中央聴覚支援学校 新館会議室（オンライン、書面併用）

参加者：井坂 行男（大阪教育大学教育学部総合教育系特別支援教育部門 教授）

伊藤 弘一郎（南大江東連合振興町会 会長）

前田 浩（大阪ろう難聴就労支援センター 理事長）

森田 雅子（大阪市教育委員会特別支援教育専門家チーム アドバイザー）

良原 恵子（大阪府臨床心理士会 副会長）

廣田 めぐみ（本校 PTA 会長）

### 1 開会

### 2 学校長挨拶

### 3 学校の様子について

幼小中高各学部及び寄宿舎の様子について書面報告

### 4 議事

①令和3年度 学校教育自己診断（報告）について 学校長より説明

<委員からの主な意見・質問及び回答>

- ・ギガスクール構想により、一人一台のタブレットが支給されている。オンライン授業で子どもが使い方を覚えるのは大切だが、板書や掲示などでの教材の見せ方といった専門性をどう生かすのか考えながら ICT 活用を進めてほしい。また、オンライン授業では知識は身につけられるけれども感情が伝わりにくい。特に小中学生は子ども同士のやりとりも大切。
- ・進路指導に関する項目での肯定的評価が保護者6割、教員8割と、結果に差がある。子どもが小さい間から、将来の目標へ向かうプロセスを保護者に伝えることで、意識の差が縮まるのではないかと。
- ・授業のわかりやすさについて、子どもの意見では「先生の手話や指文字などは分かりやすい」という回答は増えた。保護者の立場では、子どもが本当に授業がわかっているのかどうかのわかりにくいのではないかと。保護者の「もっと学力をつけてほしい」というニーズがアンケートにあらわれている。子どもが先生に質問しやすいか、質問に対して先生が答えてくれたことがわかりやすいか、を深めてほしい。
- ・教科学習の内容が自分の「将来の進路や生き方」にどのようにつながっていくのかという学びの意義を子どもに確認させていくことが必要。そのために、子どもに合った教材などを研究授業で高めてほしい。
- ・障がい理解についての項目では教職員・保護者とも肯定的評価が高く、先生方は自信をもっていい。そのうえで、次の課題である「授業のわかりやすさ」に取り組んでほしい。
- ・障がい理解は、自己理解だけでなく他の障がいに関する学習と理解も含まれる。社会へ出た時、障がいのある方との協働ができるかどうか問われる。

②令和3年度 学校経営計画及び学校評価（最終報告）について 学校長より説明

<委員からの主な意見・質問及び回答>

- ・ICT 機器使用のメリットやデメリット、児童生徒への効果などについて各部の様子をききたい。

→〈幼稚部〉幼稚部では家庭に持ち帰ることはない。実際の生活の中でのコミュニケーションを優先しているので、やりとりに機器を使うことはない。保育時にタブレットで撮影したものを活動の振り返り時に使うなどの活用をしている。

〈小学部〉昨年末頃から使っている。アプリを使って慣れることから始まり、例えば体育では、ペアになって跳び箱など自分の動きをビデオに撮って振り返るなど。教員によって技術的なばらつきがあるので研修をした。もっと使い慣れて活用していきたい。

〈中学部〉体育ではフォームの確認など振り返りに使い、改善点を知ることに使っている。意見を言いにくい子も、タブレットに入力してオンライン授業に参加することができる。中学生は機器に慣れるのが早く、積極的に使っている。

〈高等部〉授業で使用している。家庭でもパソコンを使ってのオンライン授業がスムーズにできるようになってきた。コロナ不安で登校しない生徒もホームルームに参加するなどができた。一人では操作が難しい生徒は教員とコミュニケーションをとりながら行っている。

- ・キャリア教育プログラムの改訂については、全校的な共通理解と実践に基づいた研修・研究授業を組み入れることで、有効に活用してほしい。さらに「自立活動プログラム」と連動させて取り組む観点が必要。

③令和4年度 学校経営計画及び学校評価（案）について 学校長より説明

<委員からの主な意見・質問及び回答>

- ・センター的役割について、大阪市の一般校には多くのきこえにくい小中学生が在籍している。本校は府に移管されたが、地域の課題について今後も連携を取り合ってもらいたい。
- ・保護者や子どもが手話を学ぶ機関としての「こめっこ」との連携は今後も必要。
- ・南大江地区には、いろいろとご協力いただいている。小学校の運動会では運動場を借りたり、12月の地域文化祭には毎年作品を出品してもらったりしている。作品を見て学ぶことも多く、これからも参加してもらいたい。府市に関係なく、また、障害のあるなしに関わらず、話し合いながら地域の課題を解決していきたい。
- ・聴覚支援学校の役割として、教員と幼児児童生徒間のコミュニケーションと信頼関係の構築がまず必要。それができてこそ学習指導や生活指導が実りあるものになり、保護者からの信頼も深まる。子どもたちが期待と学びへの意欲をもって通学する学校、という原点を改めて確認してほしい。

5 事務局より連絡

6 閉会